

～ 岩木山での忘れられない体験 ～

人がどん底まで落ちて苦しみに苦しみ抜いたとき、見えない何かに向かって祈らずにはいられないものです。神棚に手を合わせないと決めた私でさえも、ぎりぎりに追い詰められた状況下でできることは、天に向かってお願いをすることだけでした。

祈りが天に届く日はなかなかきませんでした。
死んでお詫びをするしかない。
家族を不幸にしている自分が消えればいいんだ。
そう思いつくと、少しは気が楽になりました。

ロープを用意して岩木山に登ったのは、1985年夏。死に場所として選んだ木の下で、私は枝に向かってロープを放りました。

そのとき、ロープが枝にちゃんと掛かっていたら、今、私はここにいないでしょう。

落ちたロープを拾いに行った先で、私はリンゴの木を見つけました。月明かりに照らされた木は見事な枝ぶりで、勢いよく葉を茂らせていました。

「なぜ、こんなところにリンゴの木が!!」と近づいてみると、それはドングリの木でした。

人が何かを発見するとき、そのきっかけは本当にささいなことです。

ドングリの木には、虫もついていなければ病気もありません。私は「なぜ農薬も肥料も使わないのに、山の木はこんなに元気なのだろう」と思いました。そして、ふと足元を見ました。

木の周りには雑草がうっそうと生い茂り、地面はまったく見えません。踏みしめると足が沈むほどやわらかく、フワツとした土です。掘ってみると手で簡単にすくい取れます。雑草を引っばると、根っこ全体が軽い力でたやすく抜け、顔を近づけてみると山の土独特のツンとした香りが私の鼻をくすぐりました。

「そうか、この土をつくれればいいのか!」

私は死のうとしたことなど、すっかり忘れていました。

「これだ、これだったんだ!」

居ても立ってもいられなくなり、私は夢中で山を駆け下りました。

私は、畑の至るところに穴を掘り、土の温度を測りました。私ひとりが入る50センチほどの穴です。そして、10センチごとに温度を測り、どこから温度が低くなっているかを突き止めました。山の土の温度は、どこまで掘り進んでも地表と温度差がほとんどないのに、普通の畑の土は深く掘るほど温度が低くなっていきました。

温度が違うだけではありません。私は雑草を刈るのをやめ、大豆をまきました。大豆の根に宿る根粒菌が土に栄養分を与え、雑草の根が土をやわらかくしてくれるからです。

地面を掘って土を観察していると、**地上にある木だけを見ているときにはわからなかったこと**が、少しずつ見えてくるようになってきました。バクテリアや微生物、細菌類が、実は植物の生育に大きく貢献していたのです。また、生き物たちも絶妙なバランスを保ちながら、植物の生命と深く関わっていたのです。

リンゴの木は、**すべてのものをつながって生かされている**。

私は、ようやくそのことに気づきました。